

II. 19

PLEASE RETAIN  
ORIGINAL ORDER



カナダ土人の起源は、大昔シベリヤとアラスカ  
 が地続きであつた頃モロゴリヤ人種が氷原を  
 渉つて来たのであつたと推測する学者も居る  
 が、容顔骨格が似て居る以外何等の証拠と  
 するものは無い。太平洋沿岸オカシナ川に  
 現在 <sup>北</sup> 五 <sup>人</sup> 種、自分達の先祖は日本から漂着し  
 たものだと信じ、日本人漁者には兄弟分の好意  
 を示す者もあり、彼等の日常語に日本語に似  
 たものが沢山あると或る漢者は語つたが、こ  
 れも想像の <sup>う</sup> 出 <sup>で</sup> ない。

カナダには、十州全体に亘つて原住民が居  
 て、異つた言葉を由つていた。標準語とい  
 うものは無い。俄し <sup>ハドソン</sup> <sup>ベイ</sup> <sup>から</sup> <sup>ラス</sup> <sup>ペリ</sup> <sup>エ</sup> <sup>湖</sup>  
 リー族のために宣教師として土人教化に一  
 身を献けていた。牧師はクリスチヤン語を  
 活字にし、聖書をクリスチヤン語にした。カナダの  
 土人語が記録されたのは、これが唯一であり、  
 インディヤンとは、クリストフワ、<sup>ス</sup>の南  
 パスが、一七九四年にアメリカ大陸に到



時、彼は探検航海の目的地、マルコ・ポロ  
 の<sup>黄金</sup>の西、東洋の東度に着したと思つて、  
 原住民をイビデヤと呼んだ。それ以来、  
 といふデヤと呼称するようになった。従  
 英米では東洋の東度人と、アメリカ人を区  
 別する為めに、アメリカ人をレッド  
 デヤと呼んだ。  
 オクタリオ内だけで数種族居る、同じ  
 言葉を使つてゐるものがある。

(一) クリー族、ハドソン湾から、五大湖~~湖~~中

のスーペリオル湖に到る一帯に住み、アルゴ  
 ビキ語を使つてゐる、遊獵の民である。

(二) オジブワ族、スーペリオル湖の西、ミシヤ

ビ、ペリーの東岸一帯に住み、狩獵を渡世に  
 してゐる。

(三) ヒューロ族、トバコ族、ニユートラール

族など、イリ湖の北、以て農業を渡世とし  
 てゐる。

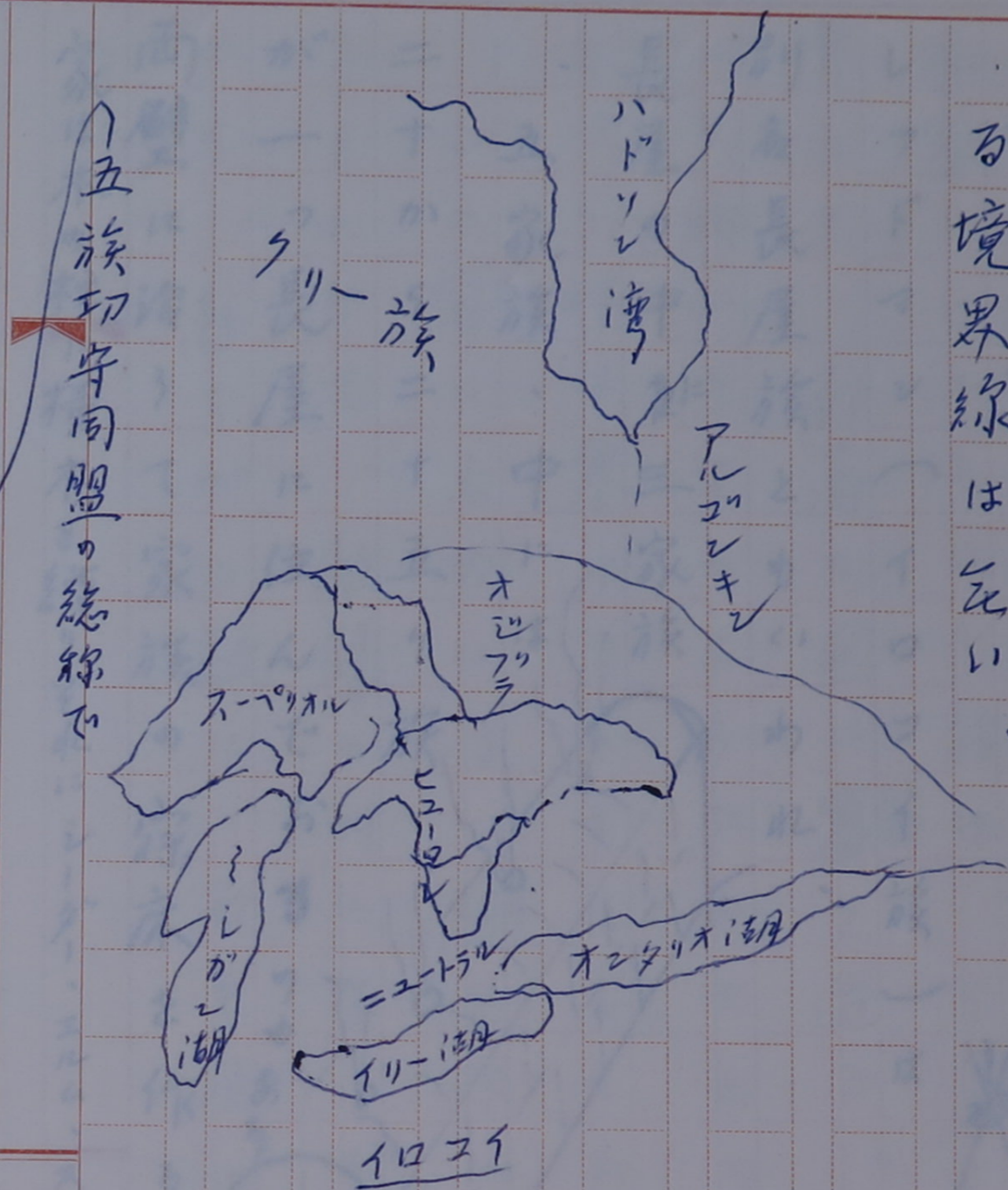
(四) イロコイ族、オクタリオ湖、イリ湖の南

一帯のニユーヨーク州に住む。

一帯のニユーヨーク州に住む。



(五) アルゴビキン族 - オタワ川以東、セントロ  
 ーレックス川以西の間に住んでゐるが、畫地左  
 右の境界線はない。



イロコイ族は、佛・英戦争に英玉方に味方  
 し、戦後の戦功を樹て、戦後南オタワ川の  
 グラズド・リバーの流域 哩の西岸の六哩の中  
 の広大な土地を下附されそこに五族が土着し  
 たが、<sup>肥沃な土地が</sup>土人は懶た下開墾せせず、  
 欧州から来た金持移民に現金売りに<sup>（エーカー）</sup>返す二畝を  
 仙如今は



狩猟しつづ流物するクリー族やオジブラ族

は水牛の皮かバーク木の皮  
テツツのさうぶ家を作り住む

レツドマン（イロコイ族）は

別名長屋族ともいわれる

長屋の中は三家族

五家族、中には

二十から二十五ヶ族

が一つ長屋に住んでおるものもある

西壁に沿うて家族の寢床を作る

家は木の柱に横木を縛りそれにシーター、エルム、スプルース又はアシの皮を張る

夏は蚤を防ぐために壁に沿うて柵を造り寝台にする

煙突のあつた地面に薪をつんで焚火するのを煙

か室内に籠り、自然眼病が多いし、老人には

盲目が多い

冬は焚火の囲りに蓆を敷いて寝る

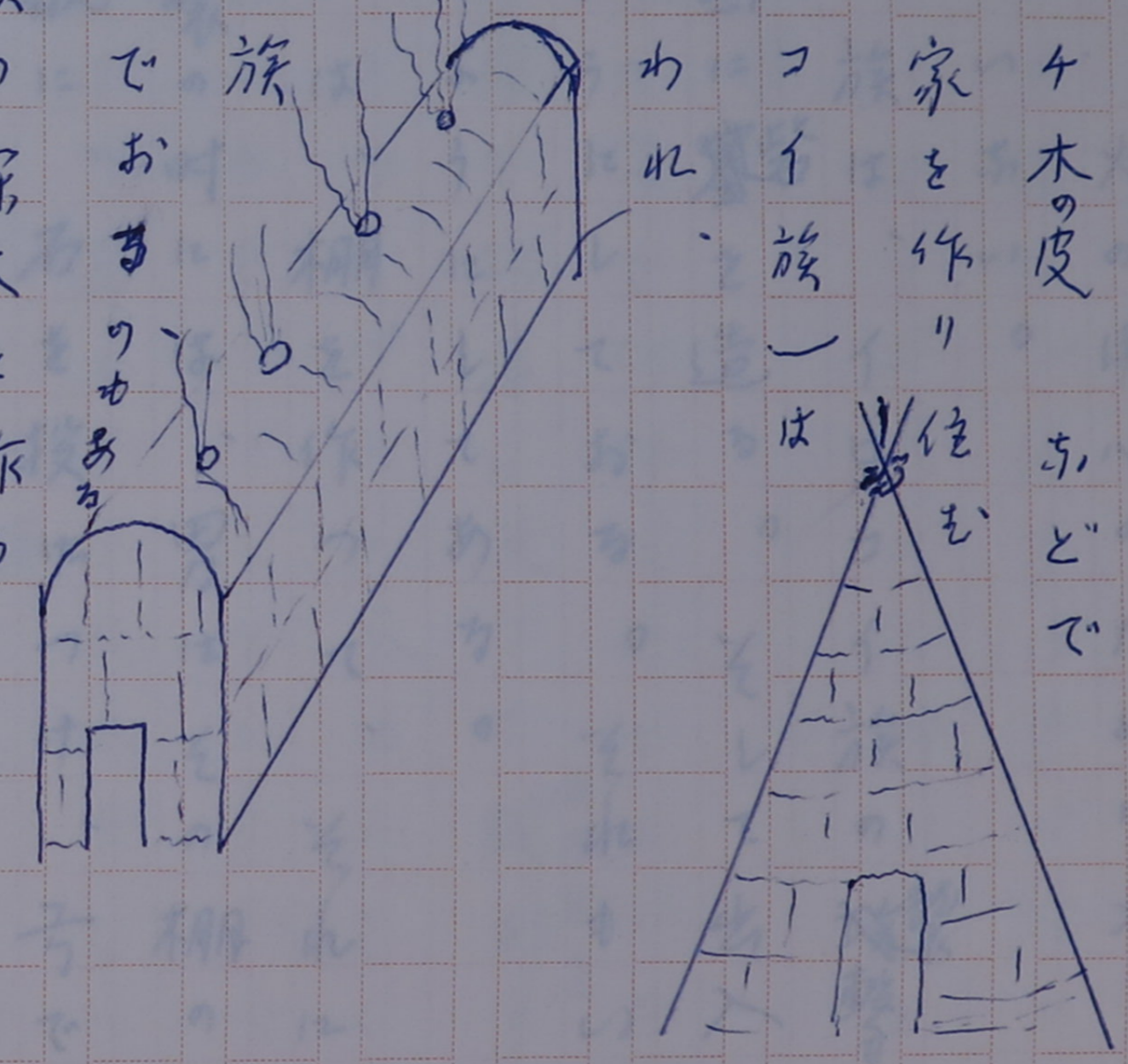
この長屋族は男は狩りをして、女は農耕をする

る、穀物は木の皮で造った樽楯に入れ蓄える

、鼠が跳ぶので、新井に竹をつるし衣類を

ぶきさける。

村落、この種の大長屋が、二十から三十ヶ集合





した村落があるが、火の用心のためは決して  
 接触して建ててはいない。  
 要塞にヒユイロの族は、イロコイ族の~~部~~部を  
 懼れて、部落の間に~~部~~部を造る。そして出入は  
 一ヶ所かきするふうにしてある。それゆゑ  
 という時は塞がらるうにしてある。  
 この砦の内側には、棚を作つて、それに様  
 子をかけて、敵襲の時には、男はその棚の上  
 から、おろかる敵に、石を投げつけ、弓で射  
 る。

ヒユイロの族が一ヶ所に十回、五年も住む  
 と、自然作物も出来ぬ。新の運搬も  
 遠くあるから、他の所らしい場所を探して移  
 動する。彼等は一年、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
 出掛けする。

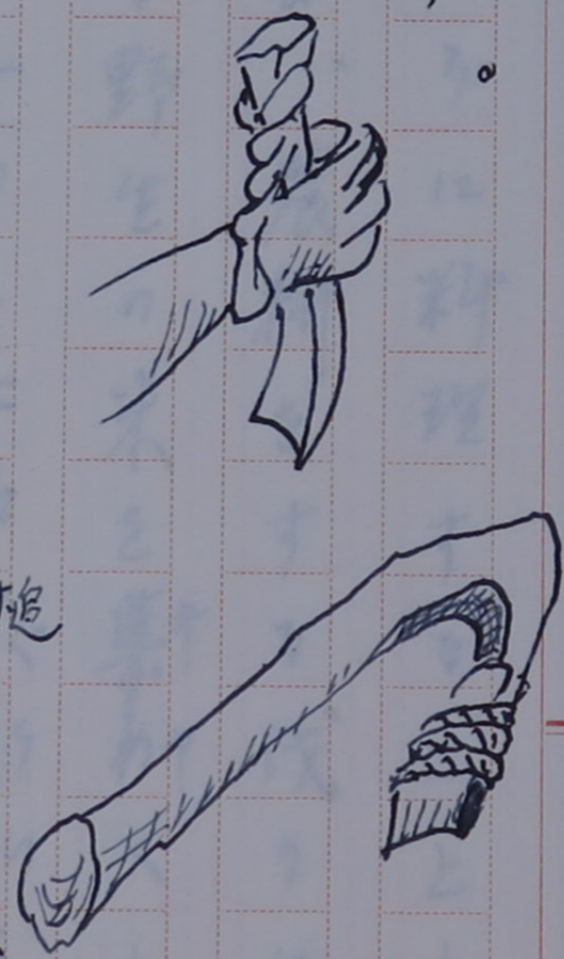
彼等は天性懶<sup>だ</sup>で、道を作る面影を避けて、出  
 来りだけ水路に~~た~~たつて何処までも往復する。  
 たまに山中に小徑が出来ているのは、鹿やム  
 一、下が通う道が自然彼等の道にあつたもので  
 川を渡りにして、由決して橋をかける事なし



南いで、斃北木を汲りか、徒歩を汲りか、大  
 川たつたらカヌーを渡る。彼等は雪が降ると  
 雪靴を作つてはく、又トボガと呼ぶ機を作  
 つて荷物運搬に使う。

彼等はバチ木の皮で巧妙にキヤヌーを造  
 る。シイダの木根を巧者に使つて、  
 造る。ニエーヨイウウのバチ木はふさくて  
 キヤヌーに出来あひので、バスクード、バ  
 ナツツ、パイロホどの節ふしの大木をくつて  
 キヤヌーを造る。キヤヌーを造る道具は圖の

如きものを使う。



彼等の使つた石器、ハチ、<sup>槌</sup>マ、皮こそが

鎗、矢尖やともろこしを粉にする石臼等の  
 の遺物がある。

銅を祭見ハ五大湖の中の最出のスピーリヤ  
 湖のミクピコイキ島の岩から純粹の銅を或  
 る土人が見付け、それをたたき伸ばして、十  
 イフにしたり、矢尖にしたり、飾りにして使  
 たり



農作部 部落の近くの開墾し易い所の雑木を  
 伐り、焼きすて。大貝殻を木の柄に絡し付け  
 ・シヤブルにして土をおこし、そこに種を下  
 す。穀物や野菜を作る。穀物は収穫してバ  
 4木皮を造った楕円の容器に蓄藏して冬の食  
 糧にする。かぼちややれおどは土の中に埋め  
 て貯藏した。

とうもろこしは石臼で碎き、水に浸して、  
 生のまま食う場合が多かた。時にはとうも  
 ろこし粉を水で二ね、焼石の上に並べて焼き

まんどやうのよりに料理することあつた。

オシブワ族は、農耕をする代りに、湖水の

水ぎわに~~出~~来る野生の米を<sup>ヤ</sup>集め、<sup>米</sup>穂

をしご<sup>き</sup>込み、一回に二石<sup>ヤ</sup>取つて帰り

棚の上に<sup>ヤ</sup>置けて、下に火をたきよく乾かして

ゆみを打ち落して<sup>ヤ</sup>貯蔵する。

南オシタリオの土人は、冬の食料に野生の胡

類を集める。そして野生の<sup>ヤ</sup>類を<sup>摘み</sup>集めて

天日で乾かし、貯蔵する。

砂糖採集部 砂糖楓の汁を集めて、土壺で煮



つめたり。氷<sup>氷</sup>下の夜、戶外を楓の汁を氷させ、凍った水を捨て砂糖分を食用にする。土人は漢、腕にふつて大部分の生活を反元ておちるのである。湖や川に産卵期に鮭川に群をふして上つてくる魚を一人はバシク皮を燃やしてキヤヌシをあやつり、一人は鎗で魚を挿える。冬は氷の下に網を張つて白<sup>ホワイト</sup>魚、マスあどを捕える。藁は草木の纖維を次で作つたもので、骨や木で作つた釣針で餌をさして釣ることもある。魚は乾したり、燻製にしてたりして貯える。

湯を作るには、火を焚いて石を焼き、バスケット(水の中よりぬよりに編んだ<sup>竹籠</sup>)に水を入れ、その中に焼石を入れて湯を作る。フリース族やヒューロ族は、飾りを好み、顔に色彩の入れ墨をする風習があつた。子女の教育、土人の子供達は、昔は学校はなかつたが、父や兄や年長者から教えられる。子が沢山あつた。弓を射る事、鎗の使用、野獣の罨をかけた。狩猟の道具を作つたり



成長すれば狩りに出掛ける。漢釣りに大人  
 に連れられて行く、娘は弟妹の守りや世話を  
 をする。お母さんから、植物や岩石から取つ  
 た色で染め方を教えてゆつたり、魚や獣肉  
 を乾すことや、獣皮をふめしたり、衣類を作  
 つたり、靴お鍋を作る事、蓆や籠を編む事  
 、四角木の根や皮で作る事を教えてくれる。  
 土人達も運動競技をやる。ラクロスは土人  
 の祭明した合い山である、角力、競争、射的  
 屋内では、彼等の作つた合い山をして遊ぶ。

子供達は、老人から昔譚を何時までも倦か  
 ず聴き入る。大鼓に合せて踊る事は非常に好  
 む。お目出致の時はお踊りをする。  
 宗教は大概の土人は皆、偉大なる霊が天上に  
 又は太陽に居ると信じている。その霊  
 の子をオシブアヤクリ族はマニト（神）  
 と呼んでゐる。南方の種族はオレエ知ル太陽  
 や雷は、神様だと信じている。それは人習理  
 解出来ない能力を表はすからである。土人は  
 お祈りをしたり、供物を供えたりする。